

Abstract

国際安全保障の理論と第一次世界大戦の勃発
— 予防戦争理論・戦争のルビコン理論と歴史研究の進展

今野 茂充（東洋英和女学院大学国際社会学部准教授）

国際安全保障の理論研究において、第一次世界大戦の勃発という事例は特別な位置を占めてきた。安全保障のジレンマ、スパイラル・モデル、攻撃・防御理論などもこの事例に何らかの形で触発されて生まれた理論だといわれている。しかし、この事例に関する理論研究の蓄積が進む一方で、ある特定の理論が圧倒的な説明能力を持つ状況がイメージしづらくなってきている。その大きな理由の一つは歴史研究の進展であり、膨大で精緻な歴史学の先行研究の存在により、歴史家に対する説得力をともなう形で事例研究を進めることが、理論研究者にとってますます困難になっている。

本論文では、近年の歴史研究の進展動向を踏まえた上で、第一次世界大戦の勃発を事例研究としてとりあげる理論研究者が直面する困難について、S・ヴァン＝エヴェラやD・コーブランドが定式化する予防戦争理論と、心理学の行動段階モデルを応用したD・ジョンソンとD・ティアニーの戦争のルビコン理論を題材として検討していく。

『国際安全保障』第44巻第4号（2017年3月）24—39 ページ。